

榎本幸人¹・川井浩史²：「瀬戸内海海産藻類標本集」(The Marine Benthic Algae of the Seto Inland Sea, Japan) の刊行

「瀬戸内海海産藻類標本集」

(The Marine Benthic Algae of the Seto Inland Sea, Japan)

榎本幸人・吉田忠生・増田道夫・川井浩史 編

神戸大学 内海域機能教育研究センター 発行 (1996)

神戸大学内海域機能教育研究センターでは旧理学部附属臨海実験所以来、その研究活動の一部として瀬戸内海域における海藻類のフロラに関する研究を行ってきた。これは分類学的、植物地理学的な興味はもちろんのこと、この海域が人的活動の影響を受けやすい閉鎖性の海域であることをふまえて、環境保全にかかわる基礎的資料を提供することをも目指したものである。これまでの調査・研究の間に集積した整理済みの海藻標本(さく葉標本)は約20万点におよんでいる。そこで、これらの標本の関連研究領域における活用をはかり、また周辺地域における教育目的の利用を可能にするため、代表的な種類をまとめ書籍状に製本した標本集(エキシカータ、図1)150部を刊行し、国内外の関係諸機関(主要なハーバリウム、博物館、研究機関など)に頒布することにした。

本標本集に使用した海藻標本はすべてセンター所属の実習船「おのころ」を利用し、編者ら(榎本幸人・吉田忠生・増田道夫・川井浩史)のほか本センター教職員を含む後記の調査協力者の協力により収集・整理・同定されたものである。過去15年間におよぶ瀬戸内海全域における調査で採集、同定された種は計

284種(緑藻36種、褐藻75種、紅藻173種)にのぼる。このうち標本集に使用可能な数量(150葉)に達した188種(緑藻22種、褐藻58種、紅藻108種)を選び、全6巻(各巻約45標本)にまとめた。形態変異の著しい種については複数の標本を含めたため、全体で265葉の標本を収めている。海藻標本は採集直後にホルマリン固定し、乾燥さく葉標本として台紙上に貼付したもので、採集年月日、採集地点(地名、緯度・経度)、採集者等が活字印刷されている。この標本をA3版の台紙に貼付し、種名(学名、和名)、参考文献、採集年月日、採集地点(地名、緯度・経度)、生育場所、採集者名、同定者名を記したラベルを添付し、各標本をポリ袋に収納、ハードカバーの書籍状に装丁した(図2)。各巻に目次(学名、和名)、カラー写真による目次(図3)を配し、巻末に学名・和名索引、概説、協力者氏名、採集地点(図、地名)のリストを備えている。

海藻類の分類を行おうとした場合、海藻類は一般に体制が単純で分類学的な特徴に乏しいため、文献や図鑑に示された外部形態の図、写真、記載のみでは同定が困難な場合が多い。これに対し、標本集などのさく葉標本を利用すれば詳細な外部形態や微妙な色合い等の特徴が比較可能になるほか、内部組織構造の検討も可能となる。また、さく葉標本の一部から色素、DNAほかの成分を抽出し各種の研究に供することも可能であろう。



図1. 瀬戸内海海産藻類標本集全6巻の装丁

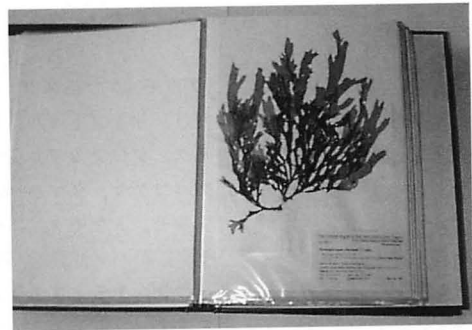


図2. 瀬戸内海海産藻類標本集 標本見本

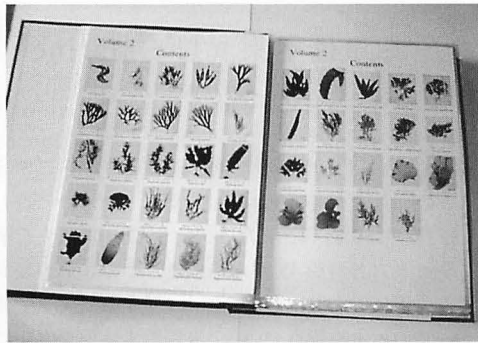


図3. 瀬戸内海海産藻類標本集 写真目次

この標本集は現時点での瀬戸内海沿岸の海藻相の概略を手近にみることを可能にするとともにその記録を後世に残すもので、広く教育・研究目的に役立つものと信じている。本標本集の刊行により内外の藻類研究者の間に瀬戸内海の花藻類についての関心が深まり、さらに研究が活性化されることを期待する。

標本集に含められた種の和名リスト

緑藻類

アサミドリシオグサ、アナアオサ、ウスバアオノリ、カイゴロモ、クロミル、シワランソウモドキ、タマゴバロニア、チャシオグサ、ツヤナシシオグサ、ネザシハネモ、ハイミル、ハネモ、パルモフィルム、ヒトエグサ、ヒメアオノリ、ヒラアオノリ、フサイワヅタ、フトジュズモ、ホソジュズモ、ホソヒメアオノリ、ボタンアオサ、ミル

褐藻類

アカモク、アツバコモンクサ、アミジクサ、イシゲ、イソモク、イチメガサ、イトアミジ、イトヨレモク、イロロ、イワヒゲ、ウスカヤモ、ウミウチワ、ウミトラノオ、オオバアミジクサ、カゴメノリ、カジメ、カシラザキ、カヤモノリ、クロメ、クロモ、クロモズク、ケウルシグサ、ケベリグサ、ケヤリ、サキブトミル、サナダグサ、シダモク、ジョロモク、シワノカワ、シワヤハズ、セイヨウハバノリ、タバコグサ、タマハハキモク、ツクバネクロガシラ、ツルモ、トゲモク、ニセモズク、ネバリモ、ノコギリモク、ハバノリ、ハバモドキ、ヒジキ、ヒラネジモク、ヒラムチモ、フクリンアミジ、フクロノリ、フタエオオギ、フトモズク、ハラヤハズ、マメタワラ、ムチモ、ヤツマタモク、ヤナギモク、ヤハズグサ、ヨレモク、ヨレモクモドキ、ワカメ、ワタモ

紅藻類

アツバノリ、アミクサ、アヤギヌ、アヤニシキ、イギス、イソウメモドキ、イソダンツウ、イソハギ、イソハリガネ、イトフジマツ、イトフノリ、イバラノリ、ウスカワカニノテ、ウスバガラガラ、ウラソゾ、エツキイワノカワ、エナシダジア、エンドウイトグサ、オオバツノマタ、オキツノリ、オゴノリ、オニクサ、オバクサ、カイノリ、カエルデグサ、カギイバラノリ、カギウスバノリ、カギケノリ、カギノリ、カタソゾ、カバノリ、キヌイトグサ、キブリイトグサ、ギボウシガラガラ、キョウノヒモ、キントキ、クサノカキ、クシノハモドキ、クモノスヒメゴケ、コザネモ、コスジフシツナギ、コメノリ、サクラノリ、シキンノリ、シマダジア、ジャバラノリ、ショウジョウケノリ、シラモ、スギノリ、スサビノリ、スズムカデノリ、ススカケベニ、セトウチフジマツモ、タオヤギソウ、タチイバラノリ、タニコケモドキ、タマイタダキ、ツノマタ、ツノムカデ、ツルシラモ、ツルツル、テングサヤドリ、トゲイギス、トサカマツ、ナガウブゲグサ、ネザシノトサカモドキ、ハイウスバノリ、ハブタエノリ、ヒゲベニハノリ、ヒゲムラサキ、ヒビロウド、ヒメテングサ、ヒヨクソウ、ヒラミリン、ヒラワツナギソウ、ピリヒバ、フクロツナギ、フクロフノリ、フササイミ、フシツナギ、フダラク、フノリノウシゲ、ベニスナゴ、ヘリトリカニノテ、ベンテンモ、ホソアヤギヌ、ホソコザネモ、ホソバノトサカモドキ、ホソヤナギノリ、ホソユカリ、マギレソゾ、マクサ、マサゴシバリ、マタボウ、マツノリ、マフノリ、マルソゾ、ミゾオゴノリ、ミツデソゾ、ミリン、ミルノベニ、ムカデノリ、モツレユナ、ヤレウスバノリ、ユカリ、ユナ、ヨツガサネ、ワツナギソウ

調査協力者（敬称略）

鯨坂哲朗、秋岡英承、阿部剛史、新井章吾、飯間雅文、井口博夫、牛原康博、河内伸子、内田卓志、奥田一雄、大葉英雄、太田雅隆、呉潤植、神谷充伸、川口栄男、山岸幸正、北山太樹、今野敏徳、小亀一弘、佐々木真人、阪口正樹、鳶田智、田中次郎、山本弘敏、奈島弘明、中野有、二宮早由子、萩原修、馬場将輔、平岡雅規、松本正喜、前田城祥、李義真、Anne van Kessel、Earl Zablackis

(¹〒656-24 兵庫県津名郡淡路町岩屋2746 神戸大学内海域機能教育研究センター、²〒657 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学内海域機能教育研究センター)